「百万人の天気教室」

白木　正規著

成山堂書店　1993年5月発行

A5判　224頁　2800円

気象情報に関心を持たぬ人は恐らく誰もいないであろう．テレビがこれに割いている時間の多さによってもうかがい知ることができる．一般の人々にとっては旅行や行事の際に気象情報の必要性が高まるが，農・漁業に従事している人々にとっては毎日の天気が生活を左右し，航空，海運関係では気象情報なしでは業務が成り立たない．

気象への関心の深さは人それぞれ異なるが，気象を知りたい人には数多く気象の入門書はかなり多く出版されている．しかし，入門より少し上のものとなると急に少なくなってしまう．この本は後者に属し，気象と深く係わっている人々が知っていなければならない基礎的な知識を網羅しているのでその方面の関係者心携の教科書として推薦できる．一般の人には日々の気象情報の中に散見する気象用語を理解し，さらに進んで気象全般の知識をもう少し突っ込んで勉強したい場合，活用するのに適切であろう．

天気は一見捉えどころが無いように思えるが，要は大気の様々の様相の絡みあった結果で，それをほぐして元になる大気の要素から始めて天気を構成する現象の仕組みへと順序立てて勉強して行けば理解しやすくなる．

問題は気象学の知識を如何に噛み砕いてわかりやすく，かつ読みやすく記述するかにある．筆者は京都大学理学部卒の理学博士で，気象研究所の予報研究部で局地風について研究され，その後気象庁予報部に移り主任予報官として天気予報や警報の防災への利活用という実務面の指導に当たった．現在，仙台管区気象台技術部長として管区の技術指導に当たっている．その経歴から，現場を通して一般の人々の気象の関心を身近に知り，その経験を生かして理論から応用までの幅広い視野で気象を眺め，どう記述すれば知りたいことが伝えられるかに徹してこの本を書き上げている．読者はあたかも筆者の講義を受けそれをメモして活字にしたらこうなったと思うような内容で，まさに「天気教室」の題にふさわしい．

全体は3部にわけて構成されている．第1部は基礎的な天気の要素について，大気の構造から始まり気圧と風の関係，熱の関係，大気中の水蒸気の諸様相，そして気象の観測の項となっている．水蒸気に関する部分で同種の本ではあまり取上げられていない対流，冷たい雨，暖かい雨に触れ一歩踏み込んでいる親切さが心憎い．

第2部は気圧系に関する部分で大気大循環，気団，低気圧，高気圧，台風，局地風，雷についてその構造とそれに伴う気象現象を規模の大きなものから小さなものへと順序だって説明している．各項とも要点を逃がさず簡明にまとめてあるが，最近テレビでよく解説される上層の流れ，寒気，暖気と地上の気圧系や気象現象との関係にもう少し頁が欲しかった．

第3部は天気予報に関する部分で天気図，四季の天気図，予報・警報の順に記述してある．天気図の部分では現在ラジオ，FAX 等で入手できるものの種類と内容を説明している．天気図を実際に使ってみようとする場合，その入手方法を教えてくれる本は殆どない．ここではどんな入手方法があるか，具体的に記してある．なかでも FAX 利用で得られる天気図の紹介と内容解説は他の本にはない斬新なものである．気象衛星の雲画像のサンプルがあれば錦上花を添えたであろう．

山での気象判断には20年以上も前から高層天気図の必要性が強調され，山岳会等の努力で夏，冬のシーズン時期のみ“ラジオたんぱ”から高層の気象通報が放送されそれを利用しているのが現状であり，関係者は何とか恒常的に入手する手立てがないかと模索し続けてきた．FAX が次第に日常化され，大規模な登山には受信装置を準備することが普及し始めている．長い間，山での気象遭難防止に微力を尽くした私にとって，この本がその方面での利用を促進するトリガーになるのではないかと思う．

気象の基礎と予報という応用面が，少ない紙面で手際よくまとめられているため，気象を仕事としている人にははもちろん，気象の知識を勉強したい人も座右の書として常備しておくことを推奨する．

筆者は書きたいこと，教えたいことが山程あるのに，枚数に制限され心ならずもつい専門的な記述になってしまった部分があるように見受けられた．とくに頁数の少なかった第3部についてはもう少し充実させ，筆者の予報の現場の経験を生かし，四季の天気図のような形式で季節の代表例でもよいから，各種天気図を組合わせた読み方というか具体的な例を記述したものがこれに続いて出版されることを期待している．

(財) 日本気象協会　中村　繁)